

一番遠くの子供を見て語れ

公益財団法人育てる会 会長 青木 孝安

仕事から子供たちのミーティングに立ち会うことが多い。

そんな時、私は、会場の端に座って、子供たちと共に若い指導者の話に耳を傾けることにしている。

子供たちは指導者の若さに共感を覚えるのか、親しみの表情で彼を見つめ、話に耳を傾ける。これは年配の指導者の場合には見られないことである。

私は会場の片隅から子供たち全体を見つめ、その指導者の「話しぶり」が、どれだけ子供たちの関心を集めているかを観察する。

指導者の「話しぶり」には、話題の投げかけ方と、発声の仕方の二つがあり、この二つの条件が揃っていれば、子供たちの関心を指導者にしっかり向けさせることができると思う。

若い指導者の場合、経験不足から、発声の仕方にひと工夫が必要と思うことが多いので、ここでは、指導者の声の出し方、「発声法」について助言を試みたい。なぜなら、いくら熱心に語っても、声そのものが子供たちの耳にしっかり届かなくては、指導者の意図が子供たちに、伝わらないと思うからである。発声法の習得こそ指導の基本と思う

のである。

一番遠くの子供をみて語れ

指導者が子供たちに語る場合、100人ほどの場合、50人ほどの場合、20人ほどの場合、2、3人の子供の場合など、それぞれ、その時の人数を意識して、適宜、発声の仕方を変える必要がある。

子供の前で話す場合、何よりも大切なことは、一番離れている子供を意識して、その子供の耳に自分の声が届いているかどうか判断しながら話すことである。指導者がいくら一生懸命に語っても、その声が全員の子供の耳に届かなければ指導が徹底しない。指導者は自分の発声の、大きさや明瞭度が適切であるかどうかを、その時の子供たちの反応を感じ取りながら話することを勧めたい。発声は大切である。

発声には三つの方法がある

指導者が子供に話す場合、三つの発声法が考えられる。

「*so so* やき発声」、「胸式発声」、「腹式発声」の三つである。

「*so so* やき発声」とは、ひそひそ話のような話し方と思えばよい。

胸式発声とは、胸を膨らませて空気を吸い、それを吐く時に発声する方法である。普

段、私たちが日常生活で語っている話し方は「胸式発声」と考えてよい。

「腹式発声」とは、下腹を膨らませて空気を吸い、それを吐く時に発声する方法で、はるか遠くの人に話しかける時のことを思えばよい。

「腹式発声」とは、早い話が、昔の軍隊で使われた、「号令」の時の発声法である。あの研究者から、最近の子供たちは、この発声はできなくなっていると聞いた。理由は、日常生活の中で、その必要がないからであるとのこと。

因みに、戦前の旧制中学生の場合、職員室に入るときは、入口に立って、「〇〇学年の、〇〇（名前）です。〇〇先生に用事がありました」と言われた。声が小さいと、「もとへ、とか、復唱」（言い直せの意味）と言われ、あわてて腹式発声に変えて、大きな声で言い直し、「よし」と言われ、やっと入室が許可されたものだ。気の弱い私はこれが苦手で、職員室行きはできるだけ友達に代わってもらった記憶がある。発声法について、興味ある話を聞いたことがある。

胸式発声でも、口の開き方を巧みに換えて、それを、昔の蓄音機のラッパのように響かせ、腹式発声と同じくらいの大きさの声にして話す人もいるとのこと。この方法だと、少ない労力で、大勢の人に長時間話すことができるわけだ。長く教職にいた人はこの特技をせんに身に付けるそうだ。これには数年の熟練を要することである。若い指導者たちも、早くそのような技術を身に着けてほしいと願うのである。

ここでは、主に、指導者の発声法について述べているが、子供たちに語る場合、子供たちの注意を集中させるための、効果的な話題の提供の仕方があるが、このことについては、別の項で記すこととする。

朝の集いでの願い

さて、立場を変えて子供たちの発声について考えよう。

「元氣よく挨拶ができ、てきぱきと会話ができる子供にしたい」、これが私の願いであった。そのための発声の基礎力養成の場として、朝の集いの場を、「胸式発声」と「腹式発声」の場と考えた。指導者と子供たちが対面して、元氣いっぱい、「おはようございます」と挨拶を交わす時を「胸式発声」の場と考え、子供たちが山に向かって、大きな声で「おはようございます」と、挨拶を交わす時を、「腹式発声」の場と考えた。これが朝の集いでの、一つの目的であった。

活力のある発声力を子供たちにつけてやりたいという願いが、その後、収穫祭などで、子供たちが大勢の前で発表する際は、「マイク無し」、「原稿読み無し」、「その時の、自分の考える言葉で語れ」、という助言、指導に繋がったことを知ってほしい。大勢の前で、マイクを使わず、原稿を見ず、大きな声で語る子供は素晴らしいと思う。

就活で、学生たちと面接する、ある大企業の経営者が語った。

「まず、元氣のない、小さな声で応答する学生から不採用とする」という言葉がいつまでも、私の耳に残っている。